国語　サンプル問題

問題．次の文章は、大嶋仁著『メタファー思考は科学の母』の一部である。これを読んで後の問一～問三に答えよ。（不適切とも考えられる表現を含むが、原文のままとした）

言語習得以前の思考とはどういうものなのか。脳科学者エデルマン[注1]は、これを「メタファー思考」と呼んでいます。彼によれば、脳は言語を持つ前に、すでにさまざまな事物の認識をしており、それらを形とか色とかさまざまな基準で分類し、互いの関連付けを行っているというのです。その思考を「メタファー思考」と呼ぶのは、イメージとイメージを関連づけ、それによってそれぞれに意味を与えるのがメタファー[注2]の役目だからです。「メタファー思考」とは、すべてをイメージの連関でとらえる思考のことで、もし彼の言うことが正しければ、文学は「メタファー」が核になっているわけですから、文学的な思考こそ人間の思考の根底にある、ということになります。文学は人間にとって必要どころか、人間の本質をなすもの、ということになります。

とはいえ、エデルマンのいう「メタファー」の意味は、いまひとつはっきりしません。それについて、詳しく説明していないのです。〔略〕

その点では、むしろ文化人類学[注3]のほうが「メタファー思考」を具体的に教えてくれています。というのも、その代表的な人物のひとり、クロード・レヴィ=ストロース[注4]（Claude Lévi-Strauss）は、人類の基本的な思考は「メタファー思考」だと言っているのです。彼のこの思考の分析は、彼の主著『野生の思考』（*La Pensée sauvage*）に鮮明に現れています。以下、エデルマンならぬレヴィ=ストロースの論を紹介し、「メタファー思考」のなんたるかを見ていきたいと思います。

『野生の思考』は、いわゆる「未開人」の思考を解明しようとしたもので、二〇世紀前半を代表する一冊と言ってよい名著です。「未開人」というとなにか知恵のおくれた人たちのように聞こえますが、レヴィ=ストロースに言わせれば人類の原型であり、どのような文明人も根底においては「未開人」なのです。では、その思考はというと、彼は基本的にこの思考は「メタファー思考」であると言っています。具体的に、これはどういう思考なのでしょうか。

レヴィ=ストロースによれば、「未開人」はすべてをすべてのメタファーとしてトラえている。たとえば、上空の世界に存在するあらゆるものを互いに関連づけ、その相互関連図をそのまま地上の事物の相互関係に当てはめ、さらには、同じ相互関連を個人の人体の各部位の相互関係に当てはめ、最終的には、それらの相互関連を、社会組織の相互関係に当てはめているのだそうです。そうなると、上空の世界と地上の世界、個人と社会、それらがすべて互いに互いを照らし合うメタファーとなり、これによってすべてが結ばれあって、調和ある世界のイメージが実現することになります。人類はそうした世界観を理想として求めつづけてきたのであり、一見すると驚くべき複雑なシステム思考のようでいて、実は単純な夢がそこに反映されているということにもなるのです。

こうした総合的思考は、人類が自分を取りかこむ環境を長い時間をかけて観察し、それを構成している多様な事物を分類し、相互に関連づけ、それによって自分たちの社会生活と個人生活に意味を与えることをしてきた結果だとレヴィ=ストロースは言います。これが人類の思考の原型たる「メタファー思考」の目指すところなのです。科学的な思考も、文学をも含めた芸術的な思考も、すべてここから出発すると彼は言います。そうした見解を、彼はたとえば次のような言葉で表しています。

> トーテム制と呼ばれるものについての起源を説明する神話は、世界中あちこちで形は違っていても、どれもが同じ内容を含んでいる。すなわち、系列の各項どうしではなく、系列全体が互いに対応するような二系列から成っているということで、しかも、その対応関係が相互にとってメタファーの関係になっているということだ。

これだけを読んでもなんのことかわかりにくいでしょうが、たとえば、「鳶が鷹を生む」という表現があります。空を飛ぶ二つの動物、すなわち「鳶」(とび)と「鷹」(たか)が対比されていますが、この対比関係が上空の動物系列とすると、それが地上の人間系列に対応していて、「平凡な親」から「非凡な子」が生まれるという意味になるのです。このとき、「鳶」と「鷹」は「平凡な親」と「非凡な子」のメタファーなのですが、「未開人」の場合は、これをもっと拡大発展させて、海の動物どうしの関係にも、陸上の植物や動物どうしの関係にも、また人間集団と人間集団の関係に

も同じ論理を当てはめるのです。そうすると、空の世界も陸の世界も、海の世界も、はたまた人間集団も、すべてひとつのメタファー・システムのなかにくみ込まれ、なにひとつ孤立することなく、すべてが関連づけられ、説明しつくされるのです。このような思考をレヴィ=ストロースは「メタファー思考」と呼び、あるいは「アナロジー思考」、すなわち「相似思考」とも呼んでいるのです。

なるほど、空の世界の分類図式をそのまま地上の世界に移しかえ、さらにまたそれを人体や社会組織にまで応用するそのやり方は、世界を相似形の集合と見ているからこそ可能なことです。天上の世界がこうでこうだから、地上の世界でもこうでこうなる。そのようにすべてを理解できるのは、相似形の認識が根底にあってのものなのです。この多様で雑多な世界を少しでも理解するために、相似形にもとづく分類を用いる。それを人類は絶え間なく行ってきたというわけです。

ここで、以前に分析した芭蕉の「古池や蛙（かわず）飛び込む水の音」に戻りたいと思います。なぜなら、この句の背後にある世界は、まさに「メタファー思考」によって構築されているからです。この句で「古池」が「蛙」に対立していること、それぞれが「静と動」「面と点」のメタファーになっていることはすでに述べました。しかも、「飛び込む」があるために、句全体は静と動、面と点といった世界対立のユウゴウ[B]を表すメタファーになっているとも言いました。このように、すべてを対立図式においてとらえ、それによって個々の事物の意味を確定していくとき、私たちは個々の事物のレベルを超えて、世界全体をメタファーの束としてとらえ、すなわち「メタファー思考」を実践しているのです。

〔略〕

「メタファー思考」が集団のなかで生きている例を、私は南米ペルーにいたときに見ました。ケチュア (Quechua) という先住民が、たとえば白と黒のブチの猫を「光と闇」と呼んでいるのを聞いたのです。彼らにすれば、なにも「文学的」をねらったわけではなく、自然にそうなるだけのことだったでしょう。彼らにとって、「白」と「黒」は単なる色ではなく、この世界を二つに分ける「光」と「闇」を想起させるものであり、その二つを一身に背負う猫は、世界全体を表すことになるのです。このような考え方こそまさにメタファー思考だと、あらためて心にメイキ[C]しましょう。

******

メタファー思考について、もう少し話を続けます。この思考は、私たちの周囲では、小さい子供によく見られます。たとえば四歳の子がトーストに塗ったジャムの形を見て、「あ、人がいる」というのがそれです。この場合、その子は本気でそこに「人」がいるとは思っていませんが、そこに「人」をみることで、食べるべき対象である「パンとジャム」を、人の世界と関連づけるのです。

メタファー思考とは、まさにこのような思考で、さまざまな事物を一定のカテゴリー[注6]の中に入れるだけでなく、事物と事物のあいだに、カテゴリーとカテゴリーのあいだに、つねに関係を見出そうとするものです。これによって、世界のすべてに「意味」、あるいは「価値」が与えられるのです。

しかし、もし人間の根底にそうした思考があるなら、人間の基本的な心が文学的であるということになり、そうなると、世に言う「文学」というメタファーの束はとくに必要がないのではないか、ということにもなります。もしも人間の思考がもともとメタファー的であるなら、すべて人間の考えることは文学となるのであり、格別に「文学」という特別な領域を設ける必要はなくなるからです。いわゆる文学は、そうなると、人間に必要なものとは言えなくなる。なぜなら、すでに人間に備わっているからです。

前にも言いましたが[注7]、鳥のさえずりも、人間の歌も、集団のなかで自分と他人の関係を結びつけるのに役立つ「感情表現」です。そのかぎりにおいて、文学のもとである歌は、人間にとって絶対必要なものと言えるでしょう。ですが、メタファーの場合はどうか。メタファーは、果たして人間を人間たらしめるほど重要なものなのか。

私のこの問いに対する答えは、いわゆる文学と呼ばれるものはそのメタファーの豊富さによって、そのメタファー性の強度によって、人間の持っている根本的な思考であるメタファー思考を強化する役目を担っているというものです。人間、どんなに論理を発達させ、概念構築を盛んにして哲学や科学を発展させたところで、その原点はメタファー思考なのですから、この基礎を強化しなくては、より高度な思考力が形成されないでしょう。先に引用した脳科学者のエデルマンによれば、メタファー思考なくして論理も科学も発達しないのですから、いわゆる文学、すなわち詩歌や物語によって、この思考を発達させておかなければならないのです。

私がこのようなことを考えるに至ったのは、認知科学というものを知ってからだと思います。認知科学者の中に、「人間の思考はそもそも文学的」

と主張する人がいて、それが私に目を開かせてくれたというか、自分の漠然とした考えに明確なリンカクを与えてくれたのです。その認知科学者の名はマーク・ターナー(Mark Turner)[注8]、その主著『文学する心』(*The Literary Mind*)が重要です。

そもそも認知科学(cognitive science)とは、私の理解では、人間の脳がどのように事物を認知するのかを研究する学問です。本来は人工頭脳の研究にフズイするものとしてあったようですが、研究分野が拡大し、心理学や言語学、文学の研究にもそれが応用されています。前述のターナーの場合、文学を認知科学的に考えようとしたように思えます。

ターナーの主張は、科学的認識の根底にも文学があるというものです。彼によれば、人間の認知はことごとくメタファーによっているのです。「未開人」も「文明人」も関係なく、すべての人間がそうだというのです。しかも、そのメタファーの基礎は身体の感覚と行動だと言い切ります。つまり、人間は身体を用いて行動しながら世界の事物を認知していく。その際、自身の身体の動きを、知らずに事物に当てはめているというのです。そうなると、外界は身体感覚と身体行動のメタファー、ということになります。

たとえば、私たちは大人になっても「電車が走る」と言います。ここにもメタファーがある、とターナーなら言うでしょう。なぜなら、「電車」は、実際は「走る」のではなく、一点からもう一点へと移動しているだけだからです。私たちが「電車は走る」と言うのは、電車の動きを自身の身体運動に無意識にたとえている、あるいは投影しているからです。この投影こそ、メタファー思考のあらわれなのです。むろん、大抵の人は、そのことに気づきませんが。

大人はさすがに言いませんが、小さい子どもは電車がトンネルに入ると、「電車が目をつぶった」などと言います。「目をつぶる」は自身の身体運動ですが、これを電車に当てはめているのです。電車は無機物であるのに、子供にとっては自分と同じ生き物です。電車は「自分」の力で動くのですから、そう感じるのも無理はありません。

ターナーによれば、私たち人間が世界について何かを語るとき、必ずこの種のメタファー表現になるのです。それは、物事を自身の身体運動を元にトラえているからだと彼は言います。しかも彼は、いわゆる文学と呼ばれるものだけでなく、科学的表現にまでそれが出てくると言います。

なるほど、そう言われてみると確かにそうで、たとえば英米の脳科学者は、脳神経が受け取った情報を別の脳神経へと伝達するとき、そこに電気作用が起こることを、しばしば「引き金をひく」(trigger) という動詞を用いて表現しています。「引き金をひく」は脳神経細胞にはあり得ないことで、脳科学者が自身の身体行動をそこに当てはめているとしか言えません。人間は自分たちを取りまく世界をこれ以上ないほど客観的に語っているつもりでも、そこに自身を投影しているのです。すべての認識にメタファー思考が介入しているというターナーの主張は、なかなかに説得力があります。

人間の思考の基本的な道具は物語力、すなわち話を創造する能力である。理知的な諸能力はそこに依拠する。(…) すなわち、一般に、人間の認知には文学的能力が必須なのである。それゆえ、人間の心は基本的に文学的なのだと言える。

これはターナーの著書からの引用ですが、彼がどうして人間の心は基本的に「文学的」なのだと主張しているかがわかるでしょう。彼にとって、人間は行動しながら話を作っていく存在で、その主人公は自分自身なのです。

このことを、彼は身体運動の物語、すなわち「行動の物語」(action story) から「出来事の物語」(event story) への「投影」(projection) という言葉でも説明しています。つまり、人間はまず自分自身の行動の物語を作り、それを外界の出来事、あるいは自分自身に降りかかる出来事に投影しているというのです。その場合重要なのは、投影される「行動の物語」の内部構造と、投影先の「出来事の物語」の内部構造とが同一であることです。その内部構造のことを、ターナーは「映像図式」(image-schematic) と呼び、これがすべての投影の基礎、すなわちメタファー思考の基礎になっているというのです。この彼の考え方は、人類学の立場から人類の基礎的思考がメタファー思考であり、その最も顕著な構築物が「神話」[1]であると述べたレヴィ=ストロースの見解ともつながります。

(大嶋仁著『メタファー思考は科学の母』弦書房、二〇一七年。出題にあたって原文の一部を省略した)

問一　傍線部A～Eの片仮名を楷書体の漢字で書け。

A．トラえ　B．ユウゴウ　C．メイキ　D．リンカク　E．フズイ

問二　傍線部（1）「神話」は、誰がどのような目的で作ったものと考えられるか、５０字以内で説明せよ。

問三　レヴィ=ストロースの言う「メタファー」と、ターナーの言う「メタファー」とでは、どのような点が相違しているか、１００字以内で説明せよ。

［注］

注1．エデルマン＝ジェラルド・エデルマン（Gerald Edelman）。米国の生物学者（1929-2014）。1972年度ノーベル生理学・医学賞受賞。

注2．メタファー＝一般には「隠喩」あるいは「暗喩」と訳される。

注3．文化人類学＝人類の社会・文化の側面を研究する学問。生活様式・言語・習慣・ものの考え方などを比較研究し、人類共通の法則性を見出そうとするもの。

注4．クロード・レヴィ=ストロース＝フランスの文化人類学者、民族学者（1908-2009）。

注5．トーテム制＝一定の社会集団、部族や親族が、その祖先の出自などとして信仰する特定の事物、主に自然物をトーテムといい、そのトーテムをまつって儀礼を執行し、崇拝することによって、集団を統合する機能をもつ社会制度をトーテム制（トーテミズム）と呼ぶ。

注6．カテゴリー＝共通の特徴をもつ事物が含まれる部類。範疇（はんちゅう）。

注7．前にも言いましたが＝著者は、別の箇所で岡ノ谷一夫著『さえずり言語起源論』を紹介して、「鳥がさえずるのも、人間が歌うのも、基本は同じ生き物の心理から生まれており、その主要目的は個体の欲求を「感情」表現にまで高めて他の個体に伝えることにある」と述べている。

注8．マーク・ターナー＝米国の認知科学者、言語学者（1954-）。

国語　サンプル問題　出題意図

大学での教育に関わりの深い内容の論説文を理解できるか否かを見る。

国語　サンプル問題　解答例

問一

解答　：A 捉　　B 融合　　C 銘記　　D 輪郭　　E 付随

出題意図：　大学での教育を受けるのに必要な，基本的な漢字が書けるか否かを見る。

問二

解答例　：「未開人」がメタファー思考によって世界の中のあらゆる事象を説明し，理解するために作ったもの。(46 字)

出題意図：文中の他の箇所と明示的には関連づけられていない語句を，文脈に従い適切な箇所と結びつけて解釈できるか否かを見る。

問三

解答例　：レヴィ=ストロースがメタファー思考を「未開人」の思考であると言っているのに対して，マーク・ターナーは「未開人」も「文明人」も関係なく，すべての人間の認知がメタファーによるものであると言っている。(97 字)

出題意図：やや散漫な文章の趣旨を正確に読み取れるか否かを見る。